

京都教区時報

京都教区広報委員会
編集長 村上透磨
京都市中京区
河原町通三条上る
TEL 075-211-3468
FAX 075-211-4345
kouhou@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

3頁 こんにちは神父さん
(武井アントニオ神父/デラバン ヴィクトル カヤオ神父)

4頁～5頁 社会と共に歩む教会
多国籍共同体への司牧活動 (ブルーノ・ロハス神父)

点訳版「京都教区時報」〈無料〉
ご希望の方は点訳ネット「レジ
ナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さ
んまでお申込みください。
TEL・FAX 079-431-8601



4. あわれみ深い大祭司キリスト

2016年 司教年頭書簡 御父のように、いつくしみ深く

へブライ書のおかげで、司祭職につい
ての深遠な教えを知ることができます。

「大祭司イエス・キリスト」がへブラ
イ書の中心的テーマである事を誰もが認
めています。教書(年頭書簡)で引用さ
れる箇所はみなへブライ書の初めの5章
からです(2・17 4・16 5・1)。
まず2・17で、イエスは「あわれみ深

い忠実な大祭司」と呼ばれます。

イエスは、神に対してピステイス(忠
実)であり、人に対しては「あわれみ深
い方」(エレモン)であるということです。
「エレモン」というギリシャ語は、非常
に少なく、他にマタイ5・7だけに使
われているようです。

しかも「大祭司」はラテン語で、ポン
ティフェクス(「橋かけ」という意味)
があり、神と人との仲介者という意味
が、キリストの大祭司としての称号に加
わります。



さて、旧約の大祭司は、贖罪の犠牲を自分のためにもくり返さねばなりませんでした。

しかし、「罪のないキリストは、私達の罪を償うために、十字架上で御父の御心にかなう生きた聖なる供え物として、ただ一度完全に捧げ、罪のあがないとゆるしを成し遂げられた」と書きます(ゆるしは神の憐れみの最も特徴的なものです)。さらに、この5章2〜3節では「私達は弱さを身にまもっているので、無知に迷っているひとを「思いやること」が出来ます」と言い、弱さは「思いやり」に

つながると言うのです。

イエス・キリストは「神の子」(5・5)として、またメルケセデク系統の「永遠の祭司」として優れておられるだけでなく、新約の真の仲介者であること、動物の血ではなくご自身の血(命)によって新しい契約となられました。主が憐れみの大祭司と呼ばれる時、憐れみの神であり神の子であり、メシアであり、仲介者であり、愛の犠牲、奉獻そのものであること。言いかえれば、救いそのもの、神の憐れみそのものであることを意味します。

いうニュアンスがあるようです。

この大祭司は、私達の弱さに同情できないような方ではありません。罪を犯さなかった以外は、すべてにおいて、私達のように、試みにあわれたのです。ですから私達は、あわれみを受け、また時機を得た助けの恵みをいただけるため、はばかりことなく「恵みの座(あがないの座、憐れみの座)に近づこうではありませんか」と、この言葉は、あのキリスト賛歌(フィリップ2・6〜11)、愛の謙虚のきわみを歌う賛歌につながります(ロゴス賛歌ヨハネ1・1〜18)。そこには、あのキリスト誕生の神秘と、超越の神秘(死と復活)に私達を招きます。ひいては、それは父と子と聖霊の交わりの中に招き入れるものなのです。その神秘の中で、私達は、アッパ父という祈りの関わりに入って行きます。

実に主の祈りは父と子と聖霊のいつくしみの愛の中でくり広げられる、神との交わりそのものとなるのです。

ここに見逃したくないことがあります。先の三カ所で「あわれみ」と記された言葉は、同じではないということです。微妙なニュアンスの違いがあります。2・17では、ギリシャ語で「エレモン」という特殊な言葉が使われています。5・2では「思いやり」と

(村上透磨)

こんにちは神父さん



武井 アントニオ神父

所属 サレジオ修道会
生年 1978年
叙階 2012年

親愛なる京都教区の皆さん、サレジオ会の武井アントニオと申します。ベトナムの出身で来日したのは18年前です。司祭に叙階されたのは2012年の3月です。私は2013年の4月から三重県の四日市サレジオ志願院に派遣され、今年で3年が経ちました。私の志願院での主な仕事は志願生の同伴と財務です。学校では非常勤の教師をしています。

志願院の生活の中で楽しいことは志願生と一緒にスポーツすることと、畑を耕すことです。京都教区の皆さん、若い司祭である私、そして、15人の志願生たちのためにお祈りください。よろしく願いいたします。



デラバン ヴィクトル カヤオ神父

所属 エスコラピオス修道会
生年 1981年
叙階 2014年

私はエスコラピオス修道会のヴィクトルと申します。1981年7月3日生まれで、フィリピンのラス・ピニャスの出身です。子供の頃からずっと先生になりたいくて、友達と一緒に先生ごっこをして遊ぶのが大好きでした。大学への進学費用が足らず、大学に入ることができませんでした。ある大学の奨学金の授与資格に合格しましたが、この奨学金は教員育成が含まれなかったため、コンピューターを選び子供の頃の夢をあきらめねばならないかと思いました。

2004年、エスコラピオス修道会に入会し、色々な経験をえました。特に2009年、神学の勉強をする途中で、修道会の従順によって、セブ島へ行くようにと言われました。その幼稚園で教えることができ、幸せでしたが、教育学部の卒業生ではなかったので心配でした。そこで一年間、毎日幼稚園で教えながら、夜に教育学部に通い、みごとフィリピン国内の教師資格試験に合格できました。先生になることができ、感謝しています。

この神様の恵みのうちに、教会と学校で、皆さんと共に新たな生活を過ごせることを本当に感謝しています。そして、まだまだ分からないことがたくさんある私ですが、これからどうぞよろしくお願い致します。

社会と共に歩む教会 多国籍共同体への司牧活動

ブルーノ・ロハス神父

私は2015年の秋から、京都教区の司祭となりました。フルネームはイヴァン・ブルーノ・ロハス・ムール (Ivan Bruno Rojas Moore) です。1958年11月3日に、ペルーの北部の町チンボテ市で生まれました。工業の盛んな町です。兄弟は5人で、私は2番目です。

大学ではエンジニアとしての勉強をして、卒業してから、ペルー国内のアマゾン地帯に入り、原住民に宣教する仕事に従事しました。この仕事は、メリノール会によって設立された Peruvian Mission Association (ペルー宣教協会) の活動です。ここで2年以上働きました。24歳のとき司祭としての召し出しを感じ、神学校に入りました。そして1990年6月24日に叙階されました。司祭としての最初の仕事は、大学で勉強した経験を生かし、アマゾンでのペルー宣教協会の活動に加わり、4年間指



導しました。

その時代は、ラテンアメリカは政治的・経済的に困難な状態にあり、たくさんの人たちが日本などに出稼ぎに行かなくてはなりません。私は彼らを見て、助けが必要だと思います。彼らを助けるために日本に行きたいと思いました。同じ文化で、同じ言葉を話す司祭がいれば、どんなに助けになることかと思っただけです。

こういうわけで、1994年12月に日本に来ました。日本のメリノール教会のサポートのおかげで、日本での活動を始めることができました。日本語を2年間勉強し、そのあと、田中司教様が、私

を京都教区に招いてくださいました。こうして1997年4月から、京都教区で働くことになりました。

働いている間に、ペルーの人たちだけではなく、その他の多くの外国の人たちにも、同じような助けが必要であることがわかりました。彼らを助けたいと思いい、スペイン語だけでなく、ポルトガル語も話せるようにと勉強を始めました。司祭に与えられる休暇の期間には、ブラジルに行つてポルトガル語を勉強しました。

最初、この仕事は、5年間ぐらいだと思つていましたが、この間に司教が大塚司教様にかわり、新しいビジョンで、福音宣教に取り組みました。掲げる福音宣教の五つの優先課題を見て、心を動かされました。これに賛同し、日本にとどまる期間を延長し、この運動に協力したいと思いました。

司教様は日本の教会に加わる外国人の共同体を、お客さまとして待遇するのではなく、兄弟として同じ信仰共同体となるように望んでおられました。このことが私の心を感動させ、もっと京都教区で働きたいと思うようになりました。

私の司牧活動は、一つの小教区に限ったものではなく、教区内の各地に散らばった外国人共同体のためです。これは以前アマゾン地帯で働いていた時に、私が経験し身に着けたものです。

現在、京都教区で、私が司牧しているラテンアメリカの共同体は、8か所で、滋賀県に4か所、三重県に4か所あります。最初、私に任命されたのは、国際協力委員会として、ラテンアメリカの共同体を担当する司祭としての司牧でした。

この仕事は数年前までは、3人の司祭の仕事でした。現在は私1人でやっています。そのためには、私の仕事を助けてくれる、ラテンアメリカの信徒の人が必要



で、リーダーたちや、カテキスタなどの信徒の養成をしなければなりません。

しかし難しい問題があります。これは外国人に特有なもので、彼らには日本人とは違った問題があります。彼らはいつまでも同じ場所に住むことが難しかったり、同じ職業を続けられなかったりして、生活の上でも職業的にも不安定なところがあります。だから、日本人の共同体と一致協力することが難しいこともあ

るのです。これらの難しい問題を解決し、よりよい成果をあげるためには、司教様の助けや、他の司祭仲間との連携と援助が必要となります。そのうえ私自身の立場として、外国から派遣された司

祭としての活動よりは、教区司祭としての立場で活動するほうが、もっとよい活動ができるのではないかと思いました。だから私は司教様に、教区司祭として移籍することの可能性を尋ねました。司教様は喜んで、私を受け入れてくださいました。

司教様をはじめ多くの司祭や外国人のリーダーと協力して、外国籍の信徒達が自発的な活動ができるようになることが、私の望みです。そして、最終的には、彼らが日本の教会共同体と一つになるように奉仕していきたいと思っています。



青年センター

春の青年のつどい
「春プロジェクト」

青年センター運営委員 奥埜のぞみ

5月21日～22日に、滋賀県のメリノールハウスで「春プロジェクト」が行われました。青年センターとしては初めての試みです。

青年センターのモットーは「つながりネットワーク 深めようコミュニケーション」です。同じ信仰をもつ青年たちが集い、分かち合い、交流することで力をもらい、希望をもって派遣されていく場になっていければと考えています。春



は出会いの季節です。新しく京都教区に
来た青年をはじめ、青年同士が繋がる場
を作るために企画しました。

集いのテーマは「Go with me!」です。
この「me」が誰であるかは、集いを通
して個人個人が考えていきました。

春プロジェクトの2日間は、大きく三
つのテーマで進んでいきました。「イエ
スとの出会い」「イエスからの離反」「イ
エスへの回心」です。

【1日目】

「初めまして」の人も「お久しぶり」
の人も、自己紹介やレクリエーションを
行い、和やかに会がスタートしました。

〈イエスとの出会い〉

自己紹介とレクリエーションの次は一
つ目のテーマ、「イエスとの出会い」に
ついての分かち合いです。スタート地点
で「青い車の窓のある所に行け」のよう
な指示書を受け取り、その場所を探して
行き、分かち合いのテーマと次の場所へ
の指示書が書かれた紙を見つけて活動し
ていくという、「宝探し形式」でグルー
プごとに分かち合いを進めていきました。

「どうしてこの会に来たのか」「これま
で青年が集う会に参加して何を得たの

か(今回何を得たいと考えているのか)」「
集いを通してどのようなイエスと出
会ったか」などについて分かち合いまし
た。メリノールハウスの庭を使わせてい

ただき、芝生の上で分かち合いをしたり
聖歌を歌ったりと、温かい雰囲気です。「自
分とイエスの出会い」について振り返り
ました。

〈イエスからの離反〉

自分自身がイエスと出会った経験を振
り返った後は、「ペトロの離反」の聖書
の箇所を分かち合いました。ペトロが3
回も裏切っていく中で、の気持ちを考えたり、
それでも尚弟子たちがイエスと共に
いたのは何故なのかを考えたりし、それ
を通して自分の信仰について分かち合
いました。

〈ミサ〉

ロウソクの落ち着いた光に包まれなが
ら、ミサに与りました。ここまでの分か
ち合いを黙想し、イエスと向き合うこと
が少しできました。

【2日目】

〈イエスへの回心〉

「パウロの回心」のビデオを見た後に
分かち合いを行いました。私がいたグ

ループでは、「ゆるし」について深く分かち合いました。

【参加者の感想】

参加者がいろいろなことを感じてくれた春プロジェクトとなりました。参加者の感想をもって、この会で青年が何を感じたのかを報告させていただきます。

濱田もえ (唐崎教会)

初めての参加で戸惑うこともありましたが、いろいろな活動を通じて青年と触れ合い、分かち合いでは人の考え方を聞くのがとても面白く、新鮮でした。みなさんの意見を聞いて、自分の考えが変わったり、逆に私の意見に賛同してもらえたり、そこから話題が広がっていくのも嬉しく、楽しかったです。この合宿を通じてたくさんの方と知り合うことができたのは、とても貴重でかけがえのない経験になりました。今後また皆さんの集まりに参加したいと強く思いました！

大崎佳祐 (伊勢教会)

イエスの愛を感じる二日間となりました。一人のカトリック信者として存在意義

があるのかと歳を重ねる度に難しく考え、てしまう自分が居ました。

今回の集まりでの分かち合いや他の青年との交流を通して、思い悩む必要はないということ、すぐ側に神様は居て「ここに居てもいいんだよ」と言ってくれた様な気持ちになりました。しばらく教会から離れてしまい聖書を読んだりミサに与る事が億劫になっていましたが、今回の集まりをきっかけにして少し近付いて寄り添うことが出来そうです。

廣口偉 (河原町教会)

春プロジェクトには初めて参加しました。初めてどころか、今年の復活徹夜祭で洗礼を受けたばかりの新米なので、春プロのお誘いを受けたときは、どきまぎしてしまいました。

一泊二日の春プロで良かったなと感じたことは、分かち合いの時間です。聖書との付き合いは、自宅で新約聖書を一人黙読するくらいでした。

分かち合いでは、聖書から得られた理解や考えを、各々話しました。そこでは自分一人では至らなかつた考えも知ることができ、時にはハッとさせられる場面もありました。

一人で読み進めるのも必要かもしれないが、いろんな人が集まって、それぞれの感想を述べ合い、議論をする、そしてキリストの教えの理解を深める、そうした時間も大事なのだなと思いました。わずかな衣食住を求めればかりに、生活を動かす歯車の回転がどんどん速くなっていく日々ですが、時間ができれば、この春プロをきっかけに、もっと青年とも分かち合いをしたいと思いました。

青年センターでは、秋に「YES

2016」という青年の集いを行います。日頃あまりできない同世代との分かち合いをすることで、自分の信仰を見つめる機会になればと思います。



司祭叙階 60周年・25周年 感謝ミサ



1956年6月9日司祭叙階

司祭叙階60周年

西村ブライス神父



1956年7月15日司祭叙階

司祭叙階60周年

バルデス・アントニオ神父



1991年5月21日司祭叙階

司祭叙階25周年

ノーサル・ヴァツラフ神父

日本教会史講座
日本の教会を支えた女性たち



講師 Sr. ロマナ 関ワカ子
(聖母訪問会)

5月21日(土)河原町教会ウィリオンホールにて日本教会史講座が行われました。今回は「丹後地方に開花した福音」をテーマに、聖母訪問会のシスターロマナ関ワカ子がお話し下さいました。当日は暁星・日星高校卒業生や、関係者が多数来場され、シスター関との再会を喜ぶ様子も見られました。

ルラーブ神父による福音の種まき

長崎での信徒発見(1865年)、禁

教の高札撤去(1873年)のニュース

丹後に一生を捧げられました。

聖母訪問会による教育

はフランスにも伝えられ、少年だったルイ・ルラーブ神父はもたらした二十六聖人のコンタツ(ロザリオ)で日本のために祈り始めました。1875年18歳でパリ外国宣教会に入会したルラーブ神父は、1885(明治18)年日本に派遣され、京都三条教会を経て、若狭、丹後、但馬までの宣教を任せられました。外国人に対するひどい偏見と迫害の中で大変な苦勞をしながら、宮津を拠点に宣教されました。宮津に教会を望んだルラーブ神父は家主の田井五郎衛門から土地を譲り受け、1896(明治29)年に宮津教会を献堂。1907(明治40)年には女子の教育のために宮津裁縫伝習所(京都暁星高等学校の前身)を設立。1927(昭和2)年の丹後大震災の際は、人々のために東奔西走し、医師でもあった戸塚文卿神父の協力を得て、岩滝で無料診療所を開設するなど尽力されました。この時の働きはカトリックに対する人々の印象を大きく変えることとなりました。1936(昭和11)年、司祭叙階金祝の記念に暁星幼稚園を設立。1941(昭和16)年84歳で帰天されるまで一度も故国フランスに帰ることなく、丹後を愛し、

パリ外国宣教会ブルトン神父によって創立された初の邦人女子修道会である聖母訪問会は、1932(昭和7)年、ルラーブ神父から宮津暁星裁縫学校を、同宣教会アノージュ神父から舞鶴裁縫女学校(日星高等学校の前身)、聖母園(舞鶴聖母幼稚園の前身)を引き継ぎ、丹後地方で教育を通して宣教に従事することとなりました。ルラーブ神父の意志をつぎ、長年校長を務めたシスター岡は素晴らしい教育者でした。また戦時中、シスターたちは軍需工場で生徒達と一緒にモンペ姿で働きながら教育を続けるなど、その身をもっての教育は、生徒たちに大きな影響を与えました。現在に至っても多くの卒業生が、家庭や社会の中で福音的価値観を実践しています。ルラーブ神父によってまかれた種が、聖母訪問会の地道な教育と丹後の土地柄のもとに、深く根を張り花開いたと感じています。

(福音宣教企画室)

第5回

「求道者に同伴する信徒」
養成講座 終了

「同窓生」、ほぼ1000人

昨年9月から延べ13回にわたって行われました、第5回「求道者に同伴する信徒養成講座」は5月19日をもって終了しました。今回の受講者は27名で、第1回講座からの「同窓生」はおよそ1000人へのぼります。

第5回講座は、初めて京都北部ブロックからも参加され、教区9ブロックからの受講者で進められました。9ヶ月という長丁場の講座では、コレイン師によるマルコ福音書の講話やみことばを自分で発表するという学び、各小教区・ブロックでの活動・現状の情報交換、また信仰の分かち合いがありました。そしてブロックをこえて信仰によって結ばれた受講者同士の関わり、「共同体」のつながりがあり、それらを実感しつつ、修了者たちは感謝と喜びのうちにそれぞれの場に派遣されました。

「痛み」と「恵み」が伴う講座

「求道者に同伴する信徒養成講座」の目的は、ただ講座を受講するだけではなく、積極的に自分の言葉で信仰を分かち合い、新しく教会を訪れる人々のよき「同伴者」として奉仕する信徒を養成することです。そのため受講者にとっては、大きなチャレンジにもなりますが、それだけにこの講座を通して大きな恵みもいただいたという振り返りが多くみられます。

ある受講者からは、「日頃、見ようとなしな『ありのままの自分』『ありのままの現実』に目を注がざるをえなかったり、読まなければと思いつつも煩わしくて放棄している『福音書』を熟読したりと『大きな痛み』を要求するプログラムを体験する事によって強いエゴイズムが少しづつ壊されたのではと思いません。キリスト者として解放され自由になるとはこのような事なのでしょう。今、『現実の教会・信徒』に求められているのは、このような『わずらわしさ』『痛み』を求める『養成プログラム』の実践だと思えます。」という感想が寄せられ、



個人にとっても、自分に向き合い、成長する機会になったようです。

また、「この講座をきっかけに、実際新しい動きを小教区の中で始めることができた」という実践の喜びの声も届いています。「同じ教会のメンバーと相談して、その場ですぐに、自分たちができることを見つけてことができました。そういうきっかけを作るものに出会うことこそが、私たちにとって一番必要なことなのではないかな、と思います」と…。

しかし一方では、「求道者に同伴することができるとかどうか参加する前も受講している今も不安は解消していません。むしろ講習を受けてからの方が、不安が

大きくなったと思います」との感想を寄せてくださった方もおりました。受講だけでなく解決できないことは、わたしたち主催者もよく理解しています。むしろこれからが本番です。

まだ「仮免」です

講座修了はあくまでも「仮免」(派遣ミサでの大塚司教のことば)で、教会での実際の体験・経験を積み重ねてこそ、本来の意味の「同伴者」に成長していきます。講座の修了を機に、それぞれの修了者が、各小教区・ブロックで、積極的に何等かの実践を通して講座での実りを活かし、その使命を果たせますように。そして受講生たちがブロックを超えて今後とも交流し続け、祈りあうことができ、ますように、願っております。

今年も、これまでの「求道者に同伴する信徒養成講座」はいったんお休みして、修了者の今後の活動を応援するために、次の「修了者のための養成プログラム」を準備しています。9月から始まる予定です。修了者のみなさまとまたお目にかかるのをお待ちしております。

福音宣教企画室

8月のお知らせ

教 区

典礼委員会 / Tel.075(211)3025 ㊤㊦㊧

典礼研修会

日 時：20日㊧ 14:00~15:30
テーマ：ミサにおけるオルガン奉仕と実践
講 師：大塚 乾隆助祭
対 象：典礼部、典礼奉仕者
会 場：カトリック西陣教会聖堂

(申込み不要、参加費不要)

青少年委員会

京都カトリック青年センター

運営委員会・聖書の集い(20日 18:00)

日 時：20日㊧~21日㊨
場 所：京都北部(詳細未定 HPで告知)
・聖書の集いはどなたでも参加可
・宿泊の場合は、事前にセンターに連絡要

信仰教育委員会

教会学校教師 研修会

日 時：27日㊧ 10:00(9:30受付)~16:00
テーマ：子どもたちに、ぜひ、伝えておきたいこと
講 師：Sr. 木村 美由紀(純心聖母会)
対 象：教会学校リーダー、および18歳以上
で教会学校の活動に関心のある方

参加費：500円

申込み：FAX.075(211)4345

締 切：8月8日㊨

京都教区カトリック正義と平和協議会
戦争と平和写真展

「アウシュビッツ」と「命のビザ杉原千畝」
の写真とビデオなど展示

日 時：6日㊧ 17:00~21:00

7日㊨ 7:00~16:00

会 場：河原町教会 ヴィリオンホール

受講費：無料

諸 団 体

望洋庵 / Tel.075(366)8337

はじめての黙想会

日 時：12日㊤ 10:00~16:30(15:30ミサ)

参加費：1,000円(食事代含む)

(電話で申し込んでください)

京都カトリック混声合唱団

練 習：7日㊨ 14:00/27日㊧ 18:00 ミサ奉仕後
カトリック会館6階

心のともしび 番組案内

テレビ(衛星.CATV)スカイAスポーツプラス
毎週土曜日 朝7:45

シリーズ「小さな気づきを大切に」

出演は阿南 孝也氏(洛星中学高等学校 校長)

ラジオ(KBS京都) ㊨~㊤ 朝5:55

㊧ 朝5:15

8月のテーマ「友好」

※10月号の原稿締切り日は8月24日㊦です。

大塚司教の

8月のスケジュール

Schedule of Bishop Otsuka



1日(月)-2日(火) 第10回 京都教区 教職員修養会
(河原町)

4日(木) 15:00 世界宗教者平和の祈りの集い
(比叡山 延暦寺)

5日(金)-7日(日) 教区 中学生広島平和巡礼

27日(土) 10:00 教区 教会学校教師 研修会
(河原町)

28日(日) 12:00 河原町教会 英語ミサ

30日(火) 14:00 福音宣教企画室 会議

31日(水) 14:00 中央協議会

聖書の集い

河原町教会 栗山 透

京都カトリック青年センターでは月に一度、青年たちで集まって聖書を読み、そこから思ったこと、感じたことを分かち合う「青年のための聖書の集い」を開催しています。月ごとに担当の青年を決めて、その青年が皆と分かち合いたい聖書の箇所を選び、当日は進行役となって分かち合いを進めていきます。聖書の集いには青年センターの担当司祭も同席し、分かち合いの最後には当時の時代背景の説明や分かち合いの総括をいただいています。最近ではペトロが離反する場面や仲間を赦さない家来のたとえ、枯れたいちじくの木の話などについて分かち合いました。

昨年度までは西陣教会の青年センター内のみで聖書の集いが行われていましたが、今年度は新たな試みとして通称「出張聖書の集い」というものを開始しました！ 青年センターでは隔月で教区内の京都南部、京都北部、滋賀、奈良、三重

の教会の施設をお借りして運営委員会という会議をしています。

そこで、今年度はこの会議の前に聖書の集いを開催し、その地区の青年たちと分かち合いたいと考えています(2月は伏見教会、4月は奈良教会にて開催)。聖書の集いと運営委員会が開催される地区には一ヶ月ほど前に青年センターから告知をしますので、青年たちにもお知らせしていただけると幸いです。

青年のための聖書の集いは毎月第3土曜日18時から行われます(開始時刻については変更の可能性があります)。多くの青年の参加をお待ちしています。またお近くの青年にもお声かけいただくと助かります。



【青年センター-HP】 携帯からでもご覧いただけます。 <http://www.kyoto.catholic.jp/seinen/>

青年センターあんでな